

蝶の飼育を試みて

八 木 弘

広大な自然の中に蝶の美しい翅の輝き、草原の花にたわむれる可憐な姿に魅せられ只ひたすら蝶採集に山野を駆けめぐり追い求めて7年、130余種を得て野外採集も一つの壁に突当たった様だ。此の1~2年1シーズンに2~3種を加える事も容易でない。

蝶友はすでに飼育に力をそそいでいる。あの荒涼とした冬山の広大な自然の中で胡麻粒より小さく木肌のくぼみや休眠芽の基部にひっそりとついている卵を探し出す事は容易ではないはずと、乗気にもならずひたすら成虫採集ひとすじに追い求め続けた私も蝶友の飼育したキリシマ・ヒサマツ・メスアカミドリシジミなど野外での採集困難なゼイフルス類を標本箱にづらりと並べ其の美しく光輝く新鮮な個体を見せつけられるに及び、かたくなに拒否反応を示していた私も遂になんとか入手したいものと飼育への意欲をかりたてられる。

1979年2月の蝶友会の例会に採卵会を行う話が出る。すかさず私も参加したいと申し入れる。

1979年3月18日、いよいよ採卵決行の日だ。目ざすは宍粟郡黒原地区。参加者O.K.H.S.氏と私の5人。目あては、ヒサマツ・アイノだ。心はずむ。S氏の運転する車に同乗現地に向う。車は揖保川沿いを北進する。山崎町を過ぎ20分程走れば揖保川は右と左に分岐する。左は引原川となり上流に引原ダムがある。右は三方川となる。目ざす黒原は三方川のの上流だ。車は三方川沿いを北上する。しばらく行くと福知溪谷にさしかかる。右手に砥峰「972米」がある。福知溪谷を過ぎれば黒原は間近だ。

さて現地に着いたが此の方面は初めてのことで様子がわからない。棲息していそうな場所を求めてあちらの谷間、こちらの尾根へと車を走らす。此の辺でどうかと意見一致。車を降りてアタックする事になる。連立って登って行く。いつの間にか1人2人と思いの方向に散って行く。結局1人とり残されるはめとなる。あちらこちらと探し求めれど卵どころか食樹のミズナラ・ウラジロガシすら容易にみつからない。かれこれ1時間余りの無駄な時が流れる。気のみあせれど、どうしようもない。皆んなはどうしているのか、良い場所を見つけ採卵しているのではあるまいかと気になる。「オーイ」と呼んでみる。「オーイ」と下方から応答がある。下山しているのだな。急ぎ車の止めている処へと引かえす。O.S.両氏が車のそばに立っている。ど

うでしたかと問えば駄目だとの答えに「ポーズ」は我だけでないのに先は安心する。K.H.両氏の姿はない、何処へいったのかな！

とりあえず昼にしようとして各自弁当をとり出し思い思いに枯草に腰を下し昼食をすます。此処は見込みなし、早く別の場所へと心せくが両氏はいっこう姿を見せない。

なにをしているんだ！「オーイ」と声を荒立て呼んでみると「オーイ」とすぐ近くの上方から返事がある。さては採卵しているぞ！O.S.両氏はす早く声の方向へと駆け登って行く。私も遅れじと後を追う。

K.H.両氏はウラジロガシからヒサマツの卵を7~8卵は採集している様だ。残り芽を我先にと切り取り目は休眠芽の基部に集中する。2~3卵採集すると休眠芽はすっかりなくなっている。皆んなの手早いのに驚く。もう一枝さがそうとK氏は大木によじ登って行く。我々も我先にと競い休眠芽を切り取り採卵に夢中になる。いたいたとの声が耳にはいると、気のみあせり容易にみつからない。7~8卵採集したところには事はすでに終わっている。さすがの大枝にも、ひとかけらの芽も残っていない。

彼方斜め上方を見ると、ウラジロガシらしき大木がそびえている。一同あれに当たってみようと雑木林をかき分け登り始める。雑木林に覆われて一握り程のヤマザクラが点在しているのに気付く。ふとメスアカはいないものかと一本のサクラを手繰りよせ手頃の一枝を見ていると、後から来る経験豊かなO.H.両氏が「こんな処にメスアカはいませんよ」といちべつもせず嘲笑うかの様に目当のウラジロガシに向ってさっさと登って行く。

メスアカは溪流沿いの空間のある所とは聞いてはいるが蝶にも変り者もいるはずと意地も手伝だって老眼鏡をかけた私の目は手にした小枝を追って行く「いたメスアカだ!!」力を得た私は次々と残った小枝を一心に探し求める。5卵を得た。近くにもまだいるはずだが、ヒサマツも気になる。急ぎ後を追う。

H氏はひとかかえもあるウラジロガシの大木によじ登っているところだ。たどりついた私を見かけメスアカなどいらないと言ったH氏がそれでもどうでしたかとたずねてくれる。「いましたよ」と得意げに答えるとO氏がどれどれと半信半疑の体で私に近よって来る。三角ケースから今採ったばかりのメスアカの卵のついた小枝を示す。間違いないのを確認すると、「これだから素人はこわい」と一言。

道草をしている間に仲間はいくもくとヒサマツに取り組んでいる。

休眠芽を見詰る皆んなの顔は真剣そのものだ。静け

さの中に緊縛した時が流れる。時折り三角ケースを開閉するかすかな音が聞える。一段落し今日の戦果を発表す。30余卵40卵とそれぞれ成果を上げている。私は半数の17卵だ。キャリアと年齢差をつくづく感じさせられる。やはり年だなあ〜とグチると、会長のS氏が「今日誰も採らないメスアカを採っているんだから殊勲賞ものですよ」となぐさめか冷やかしかわからない言葉をなげかける。

なにはともあれ初めての経験でもあり昼までは「ポーズ」で終るのではないかと思っていたのに望んでいたヒサマツ・メスアカを入手出来たのに満足せねばならない。帰りの車内で飼育について色々アドバイスを受ける。本当に楽しく、思出多き一日であった。

いよいよ飼育だ!!。日溜りの温い近くの山へと食草のヤマザクラとアラカシの新芽を求めに行く。根本から2本に分れ10程程に育ったヤマザクラの双木の1本が切り倒され其の幹元から新しく芽を吹いた数本の若木が勢よく伸び、休眠芽はすでにふっくらとふくらみを見せている。アラカシとはあちらこちらの芽を指先でつまんで歩くがまだ固く芽を吹くには旬日はかかりそうだ。とりあえず2〜3本ずつ折り持ちかえる。

ヒサマツの卵は食草の芽吹きに合すべく数日冷蔵庫にねかせる事にする。

今か今かとメスアカの卵との、にらめっこの数日続く。3月末日卵の中央に小さな孔があいているのを発見「ああ、孵化だ!!」ルーベ越しに私の目は忙しく附近を追う。「いた」小さな黒点がヒクヒクと動いている。「しめた!!」急ぎ筆先で食草に移す、飼育シャーレに日付を記す。前後して5卵中4卵の孵化を見る。幼虫は一頭ずつシャーレへ。

数日をへてヒサマツも孵化を始める。1週間程の間に17卵中9卵が孵化を見るが後は幾日も待てど暮せど孵化しない。管理状態が悪かったのかとくやまれる。孵化した幼虫だけは、なんとしても無事に育て蛹にしたいものだ。

朝な夕な「オハヨウ」「今晚は」と幼虫とのかかわりの日々が続く。次々と無事脱皮し、二令となって行く。或日食草を取り替えるべくルーベでのぞく私の目は、幼虫の異変に気付く。ヒサマツとは色彩が違っている。変だなあ〜どうなっているのだ?早速飼育の指導を仰いでいるK氏に連絡する。私の報告を聞いていたK氏、それは間違なくウラミスジだ。あのウラジロガシにはウラミスジも産みつけていたらしい。K氏も1卵ウラミスジがまじっていたとのこと。ウラミスジはコナラカクヌギと思っていたがウラジロガシにも産みつけられる事もあるんだなあ〜。

数日後亦ウラミスジでもない幼虫発見。よく観察すると、どうもオオミドロの幼虫らしい。ウラジロガシ

に産みつけられていたとは考えられない。さすれば食草のアラカシについていたのか?ではヒサマツはどうなったのか?前回食草替えの時オオミドロを見てヒサマツと思い込み、食草についたままクズ籠に「ポイ」してしまったらしい。K氏にその由を報告すると、オオミドロがアラカシに産卵していたと言うのもうかかなと疑問視する。

翌日念のためK氏と連立って食草に採取したアラカシを調べて見る事にする。現場は私の家に程近い道路わきから山道に這いるすぐそばで切り崩されたがけぶちで山道をつける時に切り倒された1本のアラカシの根本から芽を吹いた数本のヒコバエである。食こんのある一枝もぎとり葉うらを見ると偶然にもオオミドロの二令と思われる幼虫がついている。K氏に見せる。まぎれもなくオオミドロだ。まだいるぞとK氏とオオミドロの幼虫採集が始まる。結局二人で8頭の幼虫を採集する。総てが1本のアラカシに集中していた。附近にはコナラヤクヌギ等産卵に適した食樹が沢山あるのに二人で調べた範囲では一頭も見つからなかった。K氏はオオミドロはコナラカクヌギのヒコバエに1卵ずつ(たまには2卵もあるが)点々と広範囲に産つけられるはずだ。アラカシに産卵される事も異例だが、こんなに1ヶ所に集中して産つけられているのもめずらしいと首をかしげいぶかる。

母蝶がアラカシで育ったということは、アラカシを好んで産卵し、附近に適当なアラカシが見つからなく1ヶ所に多く産つけたものだと考察する。もとより素人の偶考真疑の程はさだかでない。採集したオオミドロはアラカシとクヌギで別々に飼育してみる事にする。

幼虫も三令ともなると食欲もおおせいとなり、日増しに肥大し、楽しみもひとしおだ。あの黒点がよくぞここまで育ったものだ。旬日をへて次々と蛹となる。飼育の成果は次の如し。メスアカ5卵…孵化4.蛹4.羽化4。ヒサマツ16卵…孵化8.蛹5.羽化5。ウラミスジ1卵…孵化1.蛹1.羽化1。オオミドロ…幼虫4.蛹4.羽化4。

初めての飼育であり、飼育方法も我流であるが、上記の如き成果を得と共にいくばくかの蝶の生活史の知識も得られ、蝶に対する愛着が増すのを感じる。

幾度かの脱皮を繰返し蛹に。蛹から蝶への大変革成虫が見事に殻を破り美しく翅を輝かせ羽化して来る瞬間の感激を味わう。

蝶愛好家がこの感激を忘れ得ずあらゆる労苦もいとわず飼育を続けているのであろう?

我も亦蝶友と連立ち荒涼とした冬山に卵を求めてさまよい歩くことであろう!

荒涼に卵を求めて雪をふみ

〈HIROSI YAGI〉〒678 相生市